



創立五十周年の年に

看護部長 橋 明子

二〇一一年がスタートしました。

いよいよ神戸医療生活協同組合五十周年をむかえる節目の年です。世の中の状況はなかなかよい方向に向かっていっているように感じられませんが、迷走状態の政治、就職難や不況、虐待―悲しいニュースが耳と絶えず入ります。沖縄の基地問題は、気になさることもたくさんあります。ジャパンシンジロームと世界から注目されてくる超高齢化社会に対して医療や介護はどうなっていくのでしょうか。当部二〇二二年診療報酬・介護報酬の同時改訂にむけての動向に注意が必要です。春には自分たちの最も身近な生活に影響のある選挙があります。安心して過ごせる世の中にしていくためにも、自分たちの意見や要望を届け変えていけるチャンスです。

看護部も転換期に来ているように思います。基本的な知識や技術だけでなく、様々な分野での専門性が求められています。また、自分たちだけで完結するのではなく、多職種と一緒に取り組むことや、

事業所と事業所、地域の関係性や介護の事業所・行政ほど、地域のネットワークの連携の中での役割を果たしています。看護学会のテーマ「医療生協の看護は歩みとためか、先輩の積み重ねってきた看護の歴史を引き継ぎながら、その時代時代に求めらるる役割とそれに対応できる力を



おめでとうございます

「いのちと平等」を貫き、その人らしく生きていくことを支える「看護実践」を積み重ねていくことが、

また一歩歴史を創ることになるのです。そして、自分たちの確信とするためにも、「見える化」にチャレンジしましょう。うまくいくことばかりではいい、大変なこともあるでしょうが、其々が得意なことを発揮し、協力しあえばきっと前に進めると思っています。これからも健康に、そして看護を樂しむ年にしましょう。

かびやんくズ

「できるだけ早く自宅へ」

番町診療所 安達 美枝

二〇一〇年八月一日、Nさんは満一〇〇歳の誕生日を自宅で迎えた。家族はもちろん、訪問看護師や診療所スタッフに囲まれて、少し緊張気味にぞろぞろと誇らしげにNさんは記念写真の真ん中におられる。

二〇一〇年一月、急に反応が鈍くなり、往診した医師から「年齢的なものでしょう」との判断・説明に対し、「このまま家で看たい。」「いや、病院へ行き検査を受けて原因をばきりさせた方がいい」と、予期せぬ変化は家族の大きな動揺となり、家族間の意志決定に支障をきたした。結局病院へ検査を搬送され、諸検査の結果脳に異常はみられず、その後も尿路感染による高熱・巨大痔瘻の形成と、病状は不安定であったが、訪問看護・外科医師の往診、そして家族の休まない介護と、N氏自身の「よくならない」という意欲で、八月には痔瘻も完治し、ほぼ一月当時の状態まで回復した。そして一〇〇歳の誕生日を迎えることになった。

搬送され一命はとりとめたものの翌日呼吸状態が悪化し挿管を希望するかどうか家族へ打診があった。今回も家族の意志は必ずしも一致したわけではないであろうが、「食べられない、喋れない状態はさけないが、看取るなら自宅です」という強い想いで挿管にふみきった。

挿管―気管切開―介護長期化と最悪の事態を予期したが、四日後には改善し夜間の目を迎えた。K大学病院から転院後、N氏は嚥下機能評価の結果、経口摂取可能となり、家族は窒息・誤嚥の不安はあるものの「できる限り早く自宅へ」という想いが強くなった。近日常に退院予定である。

「〇〇歳だから」という医療者の思いと、一〇〇歳のN氏を大切に思う家族の気持ち、周りの人たちに感謝の気持ちをもち生きる気力にあふれるN氏。患者・家族に学びながら、愛情あふれる医療観、看護観をもち、感性を研ぎすましていきたい。

誰もが少し安心した十二月十三日、夕食時に窒息状態となりK大学病院へ



しらない間に兔を5回迎えることになった私の人生



ふと気づけば兔を5回迎えることになった。私の人生に何があったのか振り返ってやることにした。私はもともと記憶が弱いから、頑張って思い出そうことにした。

物心ついた頃に覚えていたことというところからいっても狸じいじではない。瀬戸物の箸物である。おじいさんが飲け屋に私をよく連れて行ってくれたが、その店の玄関に狸が飾ってあったのだ。狸の目が交互にちかちか光っていたのを今でもはっきり覚えている。

小学校低学年になると夏休みは母の里、淡路島の親類の家によく行った。1週間ほど泊まって泳いで遊んだ。

小学校高学年にはサイクリングが大好きであった。私の生家は大阪市塚本である。淀川の堤防の上には道路が走っているが、車が少ないのでサイクリングには格好のルートである。ある日、私は初めて南側の堤防を走っていた。余甲で3人組の中学生に呼び止められた。いまこぼり殴られた。やがて自動車を押して家に帰ったが、2度と南側の堤防を走りなかつた。

中学生の時、母の里である淡路島へサイクリングに出かけた。長田港からフェリーにのって淡路島に渡った。長田港に近づくにつれて、トラックや車が砂煙をあげて走っていた。

5回迎えることになった私の人生

たかさんの人がお道を通っていた。昔も遊んでいた。(そのすぐ北に協同病院があるとは露知らず)淡路島を走っていた時、路肩から車輪がはずれて転倒した。膝をすりむいた。高校はサッカー部に入った。1年生がラレボエラーだった。初戦で負傷、右足首をくじいた。以後鉄いもろくは失われた。私のサッカー人生は終わった。練習で一番先にびくのは私だった。夏の泊まり込練習が終わりに倒れるように家に帰った。おしっこがまがった。目をさめた翌日の午後だった。

大学に入るとすぐ「子供会をしないか？」と先輩に誘われた。医学部でなぞ子供会なのか？好奇心の強い私はその週の土曜日に番町に出かけ、セツルメントというクラブに入っていた。クラブは夏休みに地域で健康診断をするが、道直を借りて協同病院に出かけた。病院は5階建ての長大なビルであった。

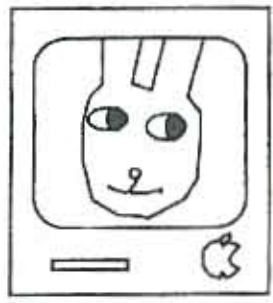
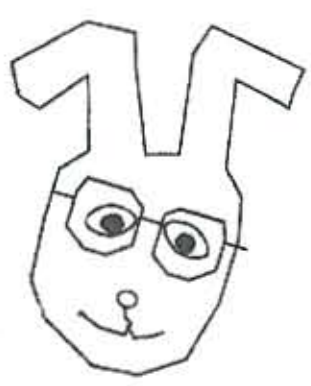
「大きい病院だ」と思って中に入ると、病院ビルの端の、2階の階であった。他は店舗と市営住宅であった。その年の秋だった。病院から泊職員旅行に誘われた。なんとたかまで連れて行ってくれるという。なんていい病院なの。行き先は確か小豆島だった。職員はいい人ばかりだった。



二年生になり看護学校生であった。たかが入部してきた。やがて私は専ら結婚を何度も申し込んだけど、オーケーしてくれず。卒業する結婚した。専との結婚は私の人生最大のイベントである。最近聞くと、「何度もやめようと思っただけ」ということだった。でも選んでくめてあげた。たかし専からは、「今も時々やめたい」と思っている。と釘を刺すかしている。

卒業したが、大学に残る気は全くなかった。自然に協同病院に就職していた。仕事はしんどかったが楽しかった。業務を顧みず、夜は職員とよく飲みに出かけた。

就職の時 Mac (パソコン)に出会う。びっくりした。特にファイルメーカーというアプリベースソフトに引き込まれた。思っように仕事ができるのである。日曜日も朝から出てきて録音ソフトにのめりこんだ。パソコンを全く知らない人でも、その日から仕事ができるようになった。ソフトの改良に五年かかり、やっと完成した。しかしソフトの評判はさくなく、たかへ。経年的にアプリが見らなくなつた。たかから。次に「こころを改良しなくてはならない」と思っていたら、地獄がやってきたのである。



地獄は悲しい経験であったが、世界が広がった。病院外の人たちと交流するようになった。福祉、建築、都市計画、学者、マスコミなどの人々を知るようになる。小さいでは家と病院を往復する長と隣の人生であつたが、面になつた。社会はこうなつていれたのか、カルチャーショックの連続であつた。人生第二のイベントである。

...それ以外をめぐり、いろいろあって、最つたり今日であつた。実は、正月に長男より初めてお年玉をもらつたのである。長男の専はインドネシア人(華僑)であるが、正月には親にお年玉を渡す習慣がある。このことで、むらつきにはなつた。そのお年玉で、今晚(一月九日)は淡路島の阿那河ホテルに専と泊まっている。小中学校の時によく泊まっていた親戚の家、近所である。夕食のフランス料理は美味しかった。ありがとう。

神戸協同病院

院長 上田耕蔵

